

いちひろ

TENRIKYO

ICHIHIRO BRANCH CHURCH

〒 635-0812 奈良県北葛城郡広陵町広瀬 306

立教 179 年
平成 28 年 4 月 28 日
第 289 号

天理教一広分教会
☎ 0745 (57) 0076

おことば抄

いかなる事と思う処、
事情から一つの理、
よう聞き取れ。

(明治 26 年 2 月 27 日)

解説 身上になったときの、思案の仕方を教えられているお言葉である。「梅谷四郎兵衛身上願」の中のもの。これと同様なお言葉が、続いて語られている。続いて言うのは、同じ伺のなかでなく、日にちを空けずに、他のおさしづでも触れられている、という意味である。

他のおさしづとは、3月6日の「榊井伊三郎母及び小人身上願」で、「一つ事情にてはあと思ふ処、一つ身の処に掛かる。」といわれている。もう一つは3月9日「飯降さと左の乳の下痛み、寝返りも自由ならざるに付願」である。そこでも「身上に事情心得ん。どういふ事身上から知らし置こう。」といわれているのである。

いずれも身上の願から何をたてられたにもかかわらず、その内容は、それぞれに抱えておられる事情についてのおさしである。おそらく身上に知らして、事情の解決を目指された、ということが出来る。身上にくらべて、事情はどこか人ごとのように扱いがちだからであろう。

最初の梅谷先生の場合、役員さんの問題である。教会設立の時に起こった出来事にその源があるようだ。「心に一つ治まり難ない事情」といわれる。

榊井先生の場合は、「見て満足、楽しみ論してやれ」といわれ、家族の治まりに触れられているようだ。

飯降さんとさんの場合、「一名一人の事情ですれば治まらん」といわれ、一軒の事情でなく、周りの方々が「万事談じ合い」することが肝心だといわれた。

こうしてみてくると、身上といっても本人だけの問題でなく、まわりの人たちとの事情、心の治まりが大切なことになってくる。

タイからの帰参者に思う

安井 清 二

タイ国のお正月といわれている「水掛けまつり」の休暇を利用して、教祖百三十年祭の旬に、タイの方々が十二名、団参してくれました。4月10日から18日までの九日間の帰参でした。そのスケジュールはなかなかの過密なものでした。

10日夜遅く関空着。教会に到着したのは日付が変わってからのようでした。にもかかわらず、11日にはアサヒビール工場見学。全員出来たての生ビールを飲んでおいしかった、と言ってました。(ビールを飲んだことのない人も飲んでいたらしい?)

その日、武田さん夫妻が道案内役をしてくれて、インスタントラーメン発明記念館を見学。また大阪難波の散策をして、夕方、私も合流しました。昨年9月以来の再会と新しいメンバーを紹介していただきました。

次の12日、14日は、大教会とご本部参拝。そして別席を運び、その後、奈良を散策。郡山イオンへ。楽しんでくれたようです。

14日の夜には、大教会長様からのお招きで、夕食パーティがあり、なごやかに楽しく、歓

談させていただきました。

15、16日は、長野県の高遠の桜見物と立山・黒部ダムルートの両壁雪の道のドライブと散策を楽しみ、深夜、大阪に戻り、一泊。なかなかの強行軍でした。17日は教会の月次祭。疲れているにもかかわらず、揃って参拝。

八十五才になる女性も元気よく、また元チュラロンコン大学教授のスミトラ先生のチームも、それに負けずにスケジュールを消化。とても七十近い方たちとは思えないほどパワーがありました。

今回の団参のキィワードである別席を運ぶ、人を救ってわが身が救かるという、お道の教理の実感。そして桜と雪。すべてを満喫して帰タイの途につくことができたことと思います。

昨年の9月からピーちゃんを中心に、スケジュールを考え組んで、会長夫妻はもちろんのこと、教会の方々のお世話取りによって、喜んで帰ってくれたようです。ウィナーさん、ピーちゃん、たいへんだったね。ピーちゃんは帰国後、一日寝込んだとか。ほんとうにごくろうさまでした。またありがとうございます。

大教会創立百十周年のときの団参が最初で

あったように思っています。そのときは、帰参者も観光と買い物を中心の気持ちであったように感じておりました。しかし、そのメンバーの中から、ヌンさんとピーちゃんの二人がTLIに学び、いまでは教会の一員として頑張ってくれています。

しかも、こうして団参の回数を重ねていくたびに感じることは、お道の教えの素晴らしさを体感していただけるようになってきたかな、ということ。なかでも、親子四人で帰られた方は、ミーナさんの隣の家の方で、ミーナさんのお父さんのおいげで、一広タイ講社に参拝に来て下さったのです。ちょうどその時は、幸枝さんと直子さんが訪タイされていた時でした。

昨年、訪タイしたときも、その方の奥さんにおさづけを取り次がせていただきました。それが今回の帰参に繋がったかなと感じています。

タイ布教三十年の歩みは、ウィナーさんとその家族からはじまりました。そのウィナーさんに繋ぎつつ、彼女の自宅に神様を祀るようになったことから、少しずつ道が拡がってきたように思います。年に一度はかならず誰かが訪タイするからという会長の約束もあ

り、会長夫妻が折を見て足を運び、小生も訪タイするたびに、講社祭をつとめさせていだいておりました。

そこへ、ヌンさんのTLI入学から、数年後、ピーちゃんもあとに続きました。彼女が卒業する少し前に、東京で東日本大震災に遭遇した節。そして彼女の母の入院。それが17日の月次祭の日で、電話連絡がありました。それで祭典終了後、お願いづとめを全員でさせていただきました。ピーちゃんは奥様よりおさづけの取り次ぎをするように教えられ、その通り、入院中の母親におさづけを取り次がせていただき、3時間後、鮮やかなご守護をみせていただいたのでした。こういうふしを通して、着実に一広タイの道は芽が出てきているように思います。

またヌンさん夫婦は日本に在住ですので、今のところ直接、タイの道にかかわることはできかねておられますが、側面から応援をしていて聞かしてもらっています。またヌンさんのお母さんも何かと心を寄せて、力になって下さるものと思います。よろしくお願いいたします。

5月末には、会長夫妻が体調万全でない中、ウイナー宅の講社のお社の新調と、一広タイ

集談所の開所のため訪タイの予定です。

もう一つ。今回はウイナーさんの姉であるミーナさんが修養科のタイ語コースに入学してくれそうです。いづれ修養科に導かせていただきたいと念願していただけに、よろこびいっぱいであります。

思い返せば、ミーナさんは、ウイナーさんが日本に留学しているときに、はじめて日本に訪れた人で、一広のタイ人ようぼくの第一号です。こうした形で修養科を志願されるのも一番最初の方になります。

また、タイ語コースのお世話取りくださる先生方は、小生の知人の方ばかりであり、海外部の中川先生、タイ出張所の野口先生にも何かとお願いをしております。

こちらの気持ちとしては万全を期しているつもりですが、何しろ彼女はまるで日本語ができません。もの静かな一面がありますので、少し心配なこともあります。親神様にお凭れして祈るしかありません。あとはミーナさんがしつかり心の修養をしてくれるように願ひ祈るのみです。

どうか、皆様方からも応援のほどをよろしくお願ひします。あらたなタイの道の発展を願つて…。

閑話休題

この3月で、天理教校本科学研究課程、及び実践課程の講義も一応終止符をうたせて頂いたので、もうこれで論文を書くこともないかと、気持ちの上で切りをつけておりました。

というのは、昨年末より体調不十分な中、『続 天理教教理史断章』出版のための校正があり、そこへ『あらぎとよりよう』誌の「お道の夫婦観」を執筆。さらに『天研』の論文「おふでさきにおけるひながた」を執筆。それに加えて、驚くべきことに『陽気』から人生の転換について執筆依頼。はいはいと返事をしたものの、どうも書く気にならず、お断りをしたところ、すでに予告広告があつて、今さら取り消すことができないとの返事。やむなく一晩で締め切りにあわせた。まるで綱渡り。そこへ毎月『グローカル』誌に連載している原稿があり、さらに『みちのとも』に「死について」の原稿。極めつきは大教会の月報記事の依頼だった。こんなこと書いてどうか、と思ひながら執筆させて頂いた。ところが、このことよつて、新たな論文のテーマが浮かんできた。なんとということだ。

